氏　名（本籍地）	満野　史子（大阪府）
学 位 の 種 類	博　士（学術）
学 位 記 番 号	甲第 70 号
学位授与年月日	平成 26 年 9 月 30 日
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第５条第１項該当
論　文　題　目	**大学生の友人関係における気遣いの研究** **―向社会的・抑制的気遣いの規定因と影響―**
論 文 審 査 委 員	（主査）　昭和女子大学教授　今城　周造
	（副査）　昭和女子大学教授　島谷　まき子
	昭和女子大学教授　藤崎　春代
	東洋大学教授　堀毛　一也

論 文 要 旨

本論文では、現代青年の気遣いを捉え直すため、①大学生の友人関係を包括的に捉えた上でその特徴を検討すること、②友人関係における気遣い尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討すること、③友人関係における気遣いの規定因を検討し、④友人関係における気遣いの影響を検討することの 4 点を目的とした。

第 1 章では、先行研究を概観し、課題を整理した上で、上述の研究目的を明らかにした。字義的・理論的検討から、気遣いを「相手および相手との関係のために行われる向社会的行動、あるいは自己防衛および関係維持のために本心を隠す抑制的行動」と定義した。

第 2 章では、現代青年の友人関係の特徴の検討を行なった(目的①)。その際、希薄な友人関係だけではなく、親密な友人関係も視野に入れ、大学生の友人関係の持ち方を包括的に類型化した。さらに、友人関係の持ち方が、友人関係への動機づけおよび対人満足度とどのように関連するかを検討した。岡田(1995)の友人関係尺度に、親密項目と孤立項目を加え、探索的因子分析を行った。その結果、親密因子と関係悪化回避因子が抽出された。この 2 因子を用いたクラスター分析により、親密群、親密・関係悪化回避群、浅い付き合い群が抽出された。パス解析の結果、友人関係への内発的動機づけが親密な関係をもたらし、それが友人満足度につながるという関係が見られた。一方で、外発的動機づけが、関係悪化を回避する関係をもたらし、それが友人満足度を低下させるという傾向も見られた。ただし、関係悪化回避と友人満足度の関係は、相関係数の結果では見られなかった。気遣いと友人満足度の関係については、友人関係の背景にある気遣いの志向性そのものを測定する尺度を作成して、再検討することが次の課題となった。

第 3 章では、友人関係における気遣い尺度を作成し、その信頼性・妥当性・規定因を検討した(目的②③)。自由記述から項目を選定し、因子分析を行なった結果、向社会的気遣いと抑制

的気遣いの 2 因子が抽出された。この 2 因子は定義と合致していた。パス解析により規定因の検討を行った結果、向社会的気遣いは、利他的理由、共感的関心(登張, 2002)、他者受容(藤本・大坊,2007)などから正のパスが見られ、これまで向社会的行動や思いやり行動(菊池, 1998)と呼ばれた概念と類似性が高いと考えられた。抑制的気遣いは、防衛的理由から正の影響を受けており、関係維持のための罪悪感(大西, 2008)から正のパスが示された。また集団主義(Triandis, 1995)とも関連があり、抑制的気遣いは、自分が傷つくのを避けるためだけでなく、友人関係を円滑化する機能もある可能性が示唆された。

第 4 章では、友人関係における気遣いの影響の検討を行なった(目的④)。気遣いと、友人関係および適応指標との関連を検討した。その結果、向社会的気遣いが親密な友人関係を促進し、親密な関係は親友満足感を高めるという傾向が顕著であった。また、抑制的気遣いは、関係悪化を回避する友人関係に発展し、不安などのストレス反応をもたらすことが示された。ただし抑制的気遣いが、関係悪化を回避する関係に発展せずに、親友満足度を増大させることがあるという結果も得られた。

第 5 章でも気遣いの規定因と影響の検討を行なった。規定因としてはストレッサー、影響としては友人満足感に注目した。普通の友人と親友とでは、友人満足感の内容が異なる可能性を考慮し、距離を置く友人関係における満足感を測定するために、友人関係における中間距離満足感尺度を作成した。親友と普通の友人を比較したところ、親友満足感と中間距離満足感のいずれについても、親友条件の方が高かった。現代の親友関係は、本音の関係でもあり、プライバシーを尊重する関係でもあることが明らかになった。友人条件では、親友条件よりも抑制的気遣いが行われていた。また、向社会的気遣いは、親友・中間距離満足感のどちらも促進するが、抑制的気遣いは、中間距離満足感のみを増大させることが示された。ストレッサーの対人過失に対しては向社会的気遣い、対人摩耗に対しては抑制的気遣いを行うことで、友人関係満足感を高められる可能性が示された。友人条件と親友条件で、満足感や気遣いの程度に違いが見られたが、パス解析では両条件間で顕著な差はなかった。

第 6 章では総括と展望を述べた。気遣い尺度の信頼性は高かった(α=.81-.90)。また規定因や影響との関連は予測通りのものが多く、気遣い尺度には妥当性もあると考えられる。気遣いの志向性の違いが親密または希薄な友人関係をもたらし、また友人関係満足感に影響を与えることが明らかになった。大学生の友人関係において、向社会的・抑制的気遣いが重要な役割を果たしていることが示唆された。

論文審査結果の要旨

現代青年の友人関係は、葛藤を避ける表面的な関係―希薄な友人関係として特徴づけられることが多い。また希薄な友人関係には、何らかの気遣いが関係していることが指摘されて来た。しかし気遣いについては、理論的・実証的な検討が十分に行われているとは言い難い。本論文は、友人関係における気遣いに注目し、その内容や友人関係への影響を、初めて明らかにしたものである。

本論文の主な知見と成果は、以下の 4 点である。

第 1 に、気遣いの定義を行い、さらに気遣いの測定尺度を作成することを通じて、気遣いには向社会的気遣いと抑制的気遣いの 2 側面があることを明らかにした。

第 2 に、向社会的気遣いは親密な友人関係をもたらし、抑制的気遣いは、関係悪化を回避する友人関係をもたらすこと、すなわち、気遣いの志向性の違いが、親密または希薄な友人関係につながることを示した。気遣いは従来、希薄な友人関係と関連が深いと考えられてきたが、親密な関係とも関連があることが明らかになり、青年期の友人関係にとってのその重要性がより増大した。

第 3 に、抑制的気遣いは友人関係におけるコストとなり、適応状態を低下させると予測されたが、抑制的気遣いがストレス反応に直結するわけではないこと、すなわち抑制的気遣いが、関係悪化を回避する友人関係に発展すると、ストレス反応を生起させることが示された。抑制的気遣いは、むしろ友人関係における満足度を高める傾向があった。

第 4 に、従来の友人関係満足感は親友満足感であり、現代青年の距離を置く友人関係においてはそれとは異なる特有の満足感があることを指摘し、中間距離満足感尺度を作成した。抑制的気遣いは、中間距離満足感を高めることが示唆された。

このように本論文では、友人関係における気遣いに関する新知見が系統的に示されており、その内容は評価できる。

しかしその一方で、いくつかの課題も残されている。第 1 に、気遣いは東洋文化と関連が深く、その内容は、本論文で示された 2 側面にとどまるものではない可能性がある。気遣いの内容についてはさらに吟味する必要があると考えられる。第 2 に、本論文では友人関係における気遣いが検討されたが、より親密な関係、たとえば恋愛関係では、気遣いとその影響はどうなるのかも今後の研究テーマになるだろう。第 3 に、気遣いと友人関係の因果関係を検討するためには、本論文で用いられた横断的方法にとどまらず、縦断的な研究が必要であろう。第 4 に、本研究の知見を、希薄な友人関係に悩む青年への臨床心理学的な支援につなげていくためには、量的・統計的な分析にとどまらず、青年の類型化や、さらには一人の青年の質的な分析に踏み込むことが必要であろう。

このように今後の課題もあるが、本論文の知見が、青年期の友人関係研究に一定の貢献をすることは間違いないと考えられる。

審査員一同は、本申請論文に対し詳細な検討を加え、慎重に審議し、本論文が新知見を含む優れた論文であり、博士論文としてふさわしいと判断した。審査委員会は全員一致で、申請者を本論文による博士(学術)の学位授与に値すると判定した。